

2月8日（日）主日礼拝レジュメ

「私たちの顔は輝いているか」 使徒の働き 6章8～15節

ステパノという使徒ではない者に対する迫害が起こった。

① マタイの福音書26章60節では「多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった。」

5節に名前が記されているステパノは、食卓のことに仕えるために選ばれた七名のうちの一人だった。それだけにとどまらず、ステパノは8節「人々の間で大いなる不思議としるしを行っていました。」使徒の働き2章22～24節を見れば、それはイエスがなされたことであり、また使徒の働き2章43節を見れば、それは使徒たちが行っていたことだった。それらのことをステパノもまた行っていた。ステパノがそのようなことができた理由は、8節「恵みと力に満ち」3節「御霊と知恵に満ち」5節「信仰と聖霊に満ち」ていたから。8節の力は聖霊から来た力と言える。

② 使徒の働き 1 章 8 節「しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。」

「恵みに満ち」とあるが、恵みとは、ステパノが人々の間で大いなる不思議としるしを行えるように御霊と知恵とに満ちた者、信仰と聖霊に満ちた者として用いられたことを意味する。

9 節のリベルテンとは、紀元前 63 年に共和政ローマのグナエウス・ポンペイウスがハスモン朝ユダヤのエルサレムに対して回りを包囲して攻めようとした。ハスモン王朝の内紛の中でポンペイウスはエルサレムを陥落させ、ユダヤは実質的にローマの属国となった。その時にポンペイウスにより捕えられ、奴隷とされていた人たちは、後になって解放され、その人たちの子孫のこと。それだけではなく、クレネ人（北アフリカ）、アレクサンドリア人（エジプト）、またキリキヤ（地中海の北東の地域）やアジアから人々など様々な所から来た人々がいました。彼らは、わざわざエルサレムの会堂まで出向いていたのかもしれませんが。この人たちが立ち上がって、ステパノと議論しようとした。しかし、彼らはステパノが語る時の知恵と御霊に対抗することができませんでした。そして、これは

③ ルカの福音書 2 1 章 12～15 節「しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」との約束の成就。

ステパノの語る時の知恵と御霊に対抗できないと考えた人たちは、ある人

たちをそそのかし、「私たちは、彼がモーセと神を冒瀆することばを語るのを聞いた。」と言わせた。13節「この人は、この聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめません。」14節で『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを聞きました。」というのは、ヨハネの福音書2章19～22節のことを指していると思われる。モーセが私たちに伝えた慣習を変えるというのは、その大切な律法をないがしろにし、聖なる所を壊すというのは、神のおられる会堂をないがしろにすることこそ、まさにモーセと神とを冒瀆していると考えたのだろう。

15節「最高法院で席に着いていた人々が、みなステパノに目を注ぐと」とあり、何か言えばそれに対して言葉尻をとらえて、さらに有罪の証拠となるようなものを得ようという思いがあったのかもしれない。すると「彼の顔は御使いの顔のように見えた。」とある。ステパノの内にあるものが顔に現れたのだろう。最高法院を構成するユダヤ人たちを前にしても決してステパノは不安になってうろたえたり、彼らを恐れたりすることが決してなかったので、彼の心は平安と確信に満ちていた。次に、信仰と聖霊に満ちていたステパノは、みことばを通しての聖霊による励ましと慰めがあった。また聖霊の与える内なる喜びと感謝にあふれていた。そして、主の栄光を彼は反映していた。栄光とは、主の聖さ、主の義、主の恵み、主のいつくしみ、主の愛、そのような主ご自身の様々な現れを彼の顔が反映していた。

危機的状況に置かれた時に、しかも思いがけないかたちで、最悪のかたちで、こんなはずではなかったと思うようなかたちで、困難に襲われた時に、私たちの信仰の真価が問われ、私たちの信仰がどのようなものであるかが現れる。どんな状況でも決して慌てたり、不安にならず、平安と確信に満ち、感謝と喜びに満たされているだろうか。私たちの顔は、その姿は主の栄光を現しているだろうか。